

Tomorrow is another day.

明日はまた新しい人生の始まる日

勇気あるものだけが道を開く

「風と共に去りぬ」の舞台を訪ねて

前文

人々の心を潤し感動を贈ってくれるもの——その一つが文学でありまた映画である。聖書に次いで世界で最も読まれているという『風と共に去りぬ』が、2006年6月、出版70周年を迎えた。舞台となったアメリカ南部のアトランタ、ジョーンズボロ、ニューオーリンズの“現在”を訪ねてみた。（文中の引用は大久保康雄、竹内道之助訳による）

本文

① アトランタ：作者・ミッチェルの生地

世界で最も読まれている小説



不滅の映画がファンを拓ける

マミーが広間から出てきた。象のような小さな賢い目をした、からだの大きな老女だ。皮膚が黒びかりに光っている純粹のアフリカ土人で、最後の一滴までもオハラ家のためにささげる覚悟をしており、エレンのつもっても強力な相談相手であり、スカーレットら三人の娘たちにとっては絶対の権力者であり、他の召使たちにとっては畏怖の的だった。

今から半世紀も前、まだ自分が中学生の頃のことだった。信州のローカル線（飯田線）の駅前広場の看板に、当時としてはとてつもなく大きな映画のポスターが貼り出された。鮮やかな色調に英語のタイトルが入った画面をバックに、豪放な男性と美貌の女性の接吻シーンが、子供心にも強烈な印象を残したものだ。



『風と共に去りぬ(“Gone with the wind”)』は、小説もだが、この映画によって世界中のファンを魅了したといえるだろう。マーガレット・ミッチェルが本を出版したのが1936年。映画は3年後の1939年に初公開された。小説は大作で読了には結構な時間と努力が要る。一方、映画も4時間を超える長編だが、10部門でアカデミー賞を受賞した映画史上、不朽の名作。波乱万丈のストーリーとロマンが一気に視聴

者を惹き込んでいく。仮りに本を読んでいなくても映画を観ている人は多いだろう。

2006 年 6 月には出版 70 周年を記念するイベントがアトランタで開催された。市内にあるミッチェルが住んでいた家を訪ねた。1900 年生まれ、「アトランタ・ジャーナル」の記者だった彼女は 26 歳のときに足をくじいてから記者をやめ『風と共に去りぬ』の執筆にとりかかった。南北戦争という劇的な時代を背景にした入念な資料の裏付けが、単なるロマン小説以上の重みを与えている。作品は世紀の大ベストセラーになったが、彼女はこの一作のみで別の作品を書くこともなく、タクシーにはねられ、48 歳の若さで亡くなった。

家はチョコレート色の 2 階建て。専属のボランティア・ガイドだという婦人のリンダさんの案内で家の中を回る。1・2 階には家族の写真や当時の生活を反映した家具が置かれ、1 階の執務部屋には、何千ページにおよぶ原稿を打ち出してきたであろうタイプライターも机上にあった。



ミッチェルが住んでいた家

一方、別室にはマーチン・ルーサー・キング博士関係の写真が数多く展示されていた。作品は発表直後から圧倒的な人気を博していった。だが、黒人社会からは批判の声が相次いだ。「ミッチェルは奴隷制度を認め賛美している」。「スカーレットのお目付け役、黒人の召使いマミーが“善良で忠実”と言われるけれど、小説に出てくる主人と召使の関係は大変なごまかしだ。あくまでも奴隷と使用人の関係ではないか・・・」等々。

ガイドはキング博士の写真の前で強調した。「ミッチェルは後年、黒人の地位向上のために大変な貢献もしているのですよ」

彼女はキング博士が卒業したモアハウス大学の黒人学生のために奨学金も出している。この日の午後、私は同じ市内にあるキング博士の生家と国立歴史地区に足を伸ばした。

歴史地区の展示館前には非暴力運動の象徴であるガンジーの像が、またモアハウス大学の前にはキング博士の大きな像があった。1964 年、最年少でノーベル平和賞を受賞、公民権運動をリードした氏は 1968 年に凶弾で倒れた。黒人への差別撤廃を訴えたワシントンでの 100 万人大行進での叫びは、歴史に残る名演説となっている。



モアハウス大学の前の像

「私には夢がある。このジョージアの赤土の丘の上で、かつての奴隷の子孫と、かつて奴隷を所有していた者の子孫が、同胞として同じテーブルにつく日がくるという夢が・・・」

『風と共に去りぬ』の主人公スカーレットが物語りの終章で、すべてを失い絶望の底から立ち上がる支えとなったものも、タラ（ジョージア州）の赤土だった。一方は小説の中、もう一方は現実の中である。全く別次元の世界ながら、同じアトランタを舞台に夢を掲げ、苦難を乗り越え挑戦していく不屈の精神は、どこかで交錯しているように私には思えるのだった。

② ジョーンズボロ：架空の土地タラ

南北戦争の歴史を詳述



多彩な人物があやなすロマン

タラを逃げ出すことはできなかった。赤土の耕地が彼女のものだという以上に、彼女は、赤土の耕地そのものだった。彼女は、血のように赤い土壌に、ふかく根をはって、綿花のようにそこから生命を吸いとってきた。(中略) 明日——おお、明日！明日こそ、あたしは自分の首にくびきをつけてでも働こう。明日こそ、やるべき仕事が山ほどある！

翌日、アトランタに住む友人K氏の運転する車でジョーンズボロを訪れた。片道 7 車線のフリーウェイを南へ約 30 分、そこから右に折れて約 5 分。物語の舞台「タラ」とされる地である。かつて南北戦争に向かう兵士たちを乗せた列車の通るジョーンズボロの駅舎は、『風と共に去りぬ』の博物館となっていた。館内には小説に関する資料、各国で出版された初版本、映画の作成時のエピソードや写真、撮影に使われた衣装が展示されていた。

館長のバージニアさんに聞く。60 代を思わせる銀髪品の品のある婦人である。

「ええ、毎日、世界中から愛読者がやってきます。国内は全地域から。国外で多いのはスイスとドイツかしら。先月はロシアから大勢、それに中東の国々からも来ましたよ。そうそう、タラの故郷アイルランドからも若い人たちが訪ねてきたわ。夏のシーズンには日本からも 1 ヶ月に 300 人くらいはやってきますね」



外に出ると、私は線路をまたぎながらカメラの構図を決めた。 **ジョーンズボロ駅舎**
電車はしばらくは来そうもない。まったく走っていないと思ったら、そうでもなかった。同行のK氏によれば「南北戦争の当時から時代は移り、現在はときどき貨物列車が走っているだけ」とのことだった。

南北戦争——1830 年代には経済的にも政治的にも南部が力を持っていたが、北部の急速な発展で優位を奪われていった。南部の 7 州が州権論によって連邦脱退を宣言、これに 4 州が加わって 11 州で南部連合国を作った。内乱(アメリカ国内ではこれを“Civil War<市民戦争>”と呼んでいる)は 5 年にわたり、南部は徹底的に破壊された。63 年にはリンカーンが奴隷解放を宣言。また「人民の人民による人民のための政治」との有名な演説もしている。

アイルランドから移住し、タラの農場主となったジェラルド・オハラ、妻である淑女エレンが奴隷を使いながら農場を経営していく。わがままで気の強い夫妻の娘スカーレットと

心優しい淑女メラニー、豪放で現実的な男性レットと軟弱な哲学青年アシュレを対比することによって、ミッチェルは読者の心をつかむのに成功した。

戦争が始まると、南部の人たちは自分たちの勝利を疑わなかった。ただ、レットと、アシュレだけは南部の運命を予感していた。それぞれ対照的な性格を持つ人間が、このタラとアトランタを舞台に戦争のはざまで生き抜き、ある者は死に、愛への葛藤を繰り広げていった。

レットが手綱を取る馬車で戦火のアトランタを逃れ、タラに帰ってみると母親は死に、父親は発狂し、奴隷は逃亡していた。食物もない。絶望の底でスカーレットは立ち上がっていく。



プランテーション

博物館のすぐ近くにプランテーションがあった。広い敷地内に白亜の大きな 2 階建て。家の裏側には小さな奴隷小屋がいくつもあった。周囲には緑の豊かな林と農園が広がっている。赤土の大地に覆われたジョーンズボロは、大都会アトランタの喧騒から離れ、かつての綿花栽培の地をしのばせる静かな落ち着きをかもし出していた。

③ ニューオーリンズ：レットとの新婚旅行

すべてを失って立ち上がる

“Tomorrow is another day!”

「明日はまた新しい人生の始まる日」



彼女はおもしろくてたまらなかった。戦争前の春以来味わったことのない楽しみを味わった。ニューオーリンズは、ふしぎな魅力をもつ土地だった。スカーレットは、まるで終身刑の囚人が釈放されたような、めっちゃくちゃなよろこびをもって、この土地の魅力を満喫した。

『風と共に去りぬ』の中心舞台はアトランタとジョーンズボロ(タラ)だが、後半では海岸都市ニューオーリンズも登場してくる。レットがたびたび訪れる場所であり、スカーレットが3度目の結婚となったレットと新婚旅行で訪れた地である。

ニューオーリンズのあるルイジアナ州は、17 世紀からフランスによる植民地化が進められた。1762 年にスペインが接収。その後、再びフランスが統治するようになり、1803 年にはルイジアナの残りの領地と共にアメリカに売り渡された。町は南部の貿易の中心ともなり、



フレンチクォーターの街角

フランスとスペインの文化が混交、ジャズ発祥の地として、世界の観光客を魅了する都市となった。フレンチ・クォーター、プランテーション、クレオール料理など、小説に書かれている南北戦争当時の姿そのままを残している。

昨年 8 月、米国史上最悪と言われるハリケーン「カトリーナ」が襲った。海面より低い湿地も多いため、8 割が浸水した。被災直後、ルイジアナ州だけで 1 千人以上の市民が死亡。ハリケーンの

影響で亡くなった人を含めると、同州の死者は 1500 人を超えたと地元紙は伝えている。

あれから間もなく 1 年。避難した市民の何割かは戻ってきたが、家もなくなり戻って来れない人も多い。被害の特にひどかった地域は今も被災家屋のがれきが放置されたままで、人影もない。一方、海面より高い位置にある中心街フレンチ・クォーターはすでに賑やかさを取り戻していた。バーボン・ストリートには音楽と観光客があふれ、ストリート・ミュージシャンも戻ってきていた。同市の観光スポットやホテルのウェブサイトでは呼びかけている。「皆さんを受け入れる準備はすでに整っています。足りないのは“あなた”だけなのです」。

私には、ここで再びスカーレットの生きざまがかみ合ってくる。南軍が敗れ、貴族的な南部社会は風と共に去っていった (A Civilization gone with the wind)。彼女の最後の支えとなったのはタラの赤土だった。勝気だったスカーレットは、今度はその意志の強さで、自分の人生を開き、家族や周囲の人々も救っていく。時代が、社会が混沌としているときは、勇気あるものが生き残っていくのだ。

物語は次の言葉で結ばれている。

“After all, to-morrow is another day”.

日本語の書籍ではさまざまに翻訳されている。

「明日はまた明日の陽が照るのだ」

「明日は明日の風が吹く」

「何はともあれ、明日はまた別の新しい日なのだから」

すべてを失った後で、彼女が再び未来に向かって生き抜いていこうとする言葉として、私は次のような意味をこめて訳したい。



ミシシッピの観光船ナッチェス号

「明日はまた新しい人生の始まる日」(「すべてはこれから始まる」という仏法で説く「本因妙」に通ずる)。その意味でこの言葉は、ニューオーリンズで惨害のなかから再び立ち上がろうとしている人々、各国でさまざまな苦難に直面している人々、人生のどん底で闘っている人々に、限らない勇気と希望を贈ってくれるような気がするのである。